

News Letter



■2013年11月14日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

授業科目でPBLを導入する教員へ教材開発費・授業開発費を支援する「PBL教育支援プログラム」に、本年度は2件が採択されました。本号では、シリーズ第1回として、教育学部瀬戸美奈子先生による「心の法則発見-適応とは何か」の報告をします。

2013年度開講 「PBL教育支援プログラム」成果報告 (1)

「心の法則発見-適応とは何か」

🍌 科目の概要

PBLセミナーF(心の法則発見-適応とは何か)は、事例シナリオをもとに問題を考える中で、心理学的知見に基づく発達と障害についての理解、さらに家族、社会という観点から適応と援助について多角的に考えることを目的とした授業です。

🍌 授業の目標

具体的には以下の3つを授業の目標としました。

- ①臨床心理学、発達心理学の基礎的な知識を習得する。
- ②事例シナリオを通して、発達のプロセスや障害についての理解を深める。
- ③事例シナリオから適応と援助に関する課題を発見し、多角的な視野から考察する。

🍌 授業の進め方とねらい

授業では「適応とは何か」というテーマを掲げ、映画を事例シナリオとして分析していきます。受講者は臨床心理学・発達心理学の理論や症例について自己学習を行い、その知見をもとに映画を分析し、さらに各自の気づきから適応と援助に関する課題を発見して考察していくというプロセスを経て知識を深めていきます。映画を事例シナリオとして用いる理由としては2点あります。第一に学生がこれまで楽しむものとしてとらえていた映画という題材が、臨床心理学や発達心理学の観点を用いて分析することによって新たな発見があることに気づくことができるからです。第二に映画の分析から、個人の心理をとりまく家庭、社会という広い視野から人間の適応について思考を深めていくことを意図しています。

🍌 実際の授業の内容

授業では①発達障害、②精神障害、③幼児期から児童期の発達、④青年期の発達という4つの事例シナリオを中心に扱いました。各シナリオごとに、事前の自己学習→事例シナリオ分析→課題発見→自己学習とグループディスカッションという流れで授業を構成しています。最後にグループで自由に映画を選び、書くグループで選んだ映画を自分たちでテーマを決めて分析し、発表するという展開で授業を実施しています。

(1)導入

映画をシナリオとして分析することは受講生にとって初めての経験です。方法になれるために『恋愛小説家』(原題: As Good as It Gets, 1997年製作のアメリカ映画。ジェームズ・L・ブルックス監督)を視聴し、分析しました。強迫神経症を患う主人公がこの映画では描かれていますが、主人公の行動とパーソナリティの特徴を理解し、周囲の関わりによって病態が変容していくプロセスについて考えました。

(2)発達障害

『レインマン』(原題: Rain Man, 1988年公開のアメリカ映画。バリー・レヴィンソン監督)を視聴しました。自閉症の特徴を分析しながら、家族の関わりや、障害をもった人たちが生きやすい社会のありかたについてグループでディスカッションを行いました。

(3)精神障害

精神障害の事例として『ビューティフル・マインド』(原題: A Beautiful Mind, 2001年公開のアメリカ映画。ロン・ハワード監督)をとりあげました。

(裏面に続く)

これはノーベル賞受賞の实在の天才数学者、ジョン・ナッシュの半生を描いた映画です。

ここでは精神障害をもった人の苦しみをどう理解するかに焦点をあてながら、主人公とその家族の行動を分析していききました。

ここまで映画を見たあとに、「障害と適応」をテーマにグループごとにテーマを決めて、プレゼンテーション資料を作成し発表を行いました。映画に触発されて統合失調症や自閉症についてより詳しく調べたグループやあらたに他の障害について調べたグループなどここまでの知識をさらに発展させる方向でテーマを設定できるようになりました。

(4) 幼児期から児童期の発達

『となりのトトロ』(1988年。スタジオジブリ制作)

昭和30年代前半の日本を舞台にしたファンタジーを題材に、サツキとメイの姉妹を比較することで幼児期、児童期の特徴を理解し、トトロの存在意味について考えました。

(5) 青年期の発達

『スパイダーマン』(原題: Spider-Man, 2002年のアメリカ映画。サム・ライミ監督)

青年期のアイデンティティをテーマに映画を分析しましたが、分析にあたっては自分たちで分析の枠組みを決め、登場人物の行動や心理、人間関係を

とらえていきました。

『となりのトトロ』『スパイダーマン』を見た後、「発達と適応」をテーマにグループごとにテーマを決めて、プレゼンテーション資料を作成し発表を行いました。青年期の間人間関係の特徴、幼児期の発達など映画をヒントに、テーマ設定を行ったグループが多かったと思います。

(6) グループごとの映画分析

最後にグループで1つ映画を取り上げ、テーマも分析の観点もグループで話し合って決め、映画分析を行いました。各グループでとりあげた映画は『博士の愛した数式』『千と千尋の神隠し』『ウォーターボーイズ』『休暇』『ツレがうつになりまして。』の5本です(図1、図2)。

成果

今回映画をシナリオとしてとりあげることで、障害や発達という人間の側面を正しい知識を持ちながら、それをどのように理解していくかという課題にどのグループも興味をもって取り組んでくれました。意欲的で話し合いにも積極的で、関心が高かったように思います。またこうしたPBLでの経験が、日常生活の事象を心理学の枠組みでとらえる面白さにつながっていくことを期待しています。

(瀬戸美奈子)

家族以外の人と関わることで・・・

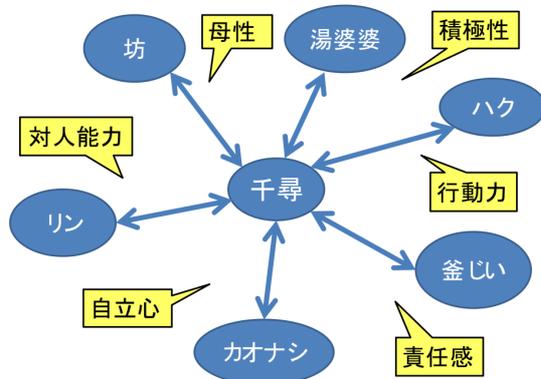


図1 映画『千と千尋の神隠し』の分析

周囲の人の対応

- 十分に休息できる環境をつくる
- 励ましと気晴らしは逆効果
- できるだけそばにいる
- 気になる症状は医師に相談する
- 不用意に気を遣わない
- 今日の調子はどう? 早く良くなるう」といった言葉はいわない
- 病気の話はしない
- うつ病について正しい知識を持つ

図2 映画『ツレがうつになりまして。』の分析